監督：酒井耕・濱口竜介

東北記録映画三部作 全四編

TOHOKU DOCUMENTARY TRILOGY DIRECTED BY KO SAKAI AND RYUSUKE HAMAGUCHI

ここに、被災の風景はほとんど現れない。

あるのはただ、語ること、そして聞くことだ。

第一部

なみのおと

第二部

なみのこえ

新地町／気仙沼

第三部

うたうひと

■主催：公益財団法人茨木市文化振興財団

■砂連尾理「猿とモルターレ」連携事業

東北記録映画三部作

監督：酒井耕・濱口竜介

■作品紹介

今作品は2011年3月11日の津波被害を受けた三陸沿岸部に暮らす人々の「対話」を撮り続けたドキュメンタリー映像です。姉妹、夫婦、消防団仲間など親しいもの同士が、震災について見つめ合い語り合う“口承記録”の形がとられています。互いに向き合い対話する事は震災そのものに向き合うことでもあるのかもしれないと考え、被災地の悲惨な映像ではなく、対話から生成される人々の「感情」を映像に残すことで、後世に震災の記憶を伝えようと試みました。撮影を進める中で2人の監督も互いに対話を重ね、震災を自らに関わる出来事として受け止める姿勢をより強くしていきました。『PASSION』『The Depths』などで注目される濱口竜介が、『ホームスイートホーム』『CREEP』を手掛けた酒井耕と共同で監督。

「この“語り”は、実際は過去や未来のためという以上に、今まさに起こっている「復興」の活動そのものなのではないだろうか、という気がしています。それは、瓦礫をただの瓦礫にしないための、個人と共同体の歴史を取り返す作業であるからなのです。」(山形国際ドキュメンタリー映画祭・東日本大震災復興支援上映プロジェクト「Cinema with Us ともにある」カタログより 作者のことば)

■あらすじ

岩手県田老町の女性によって読まれる昭和8年3月3日の大津波の紙芝居にはじまり、気仙沼、南三陸、石巻、東松島、新地町と南下しながら、消防団員や市議会議員、夫婦や姉妹など、親しい者同士や監督との対話が行われる。津波の恐ろしさや悲惨さと復興への強い思いが混在したその声は、鑑賞者も含めた聞き手の存在によってこそ生まれる貴重なものであり、100年、200年先まで伝えるべき価値を宿している。移動の間に朗読される昭和8年津波被害を記録した山口弥一郎のテクスト、冒頭の紙芝居、土地の風景や音とともに、幾度も津波に襲われた歴史をもつ三陸の姿とそれでもそこに住み続ける人々の意志とが描かれ、故郷とは何かという問いが自ずと発生する。土地の記憶を切断してしまった出来事を、語り継ぐ言葉のひとつひとつがその答えなのかもしれない。

■作品紹介

『なみのこえ　新地町』『なみのこえ　気仙沼』は、東日本大震災における津波被災者へのインタビュー映画『なみのおと』の続編。酒井耕・濱口竜介両監督は前作の完成から1年以上撮影を継続し、福島県新地町と宮城県気仙沼市の被災者、約20名の対話を新たに『なみのこえ』としてまとめた。人々が抱える問題も思いも発生直後とは違って来ている現在、出演者＝インタビュイーは、夫婦や親子、友人、職場仲間たちとの会話の中で薄れて行く記憶を呼び戻し、思いを新たにして行く。前作『なみのおと』では、津波被害の体験者同士が共に震災と向き合う「新しい言葉」をつくりだしていく過程が記録され、鑑賞者からは「言葉に強い現実感を感じた」という反応が多くあった。この現実感を未来の人々へも届けるため、監督達は劇映画の手法をドキュメンタリー映画に適用するという前作の様式を徹底する。日常-非日常、被災者-非当事者、聞くこと-語ること、被写体-鑑賞者、シリアス-ジョーク、二人の監督、フィクション-ドキュメンタリー、あらゆる分断線を越えた境界から未踏の故郷＝現実は生まれ、震災を知らない100年後に暮らす人々と私たち、そして過去に生きていた人や動物やモノとを繋いでいる。

■あらすじ

酒井耕・濱口竜介の共同監督による東北記録映画三部作　第二部。前作『なみのおと』の手法を受け継ぎながらも、震災から時間を経て記録された対話者たちの表現はより自立性を増し、様々な声の混交する町の肖像が描かれる。監督たちは前作を作る過程で出会った東北の伝承民話にヒントを得て、口承記録の方法を徹底する。これは震災という粗大な印象の底に隠れてしまった幾多の視点と声を蘇らせる事で出来事を100年200年の先まで伝える術であり、自然災害の現実感とそれに向き合う個々の人間の心象を観る者に理解させる。飲食店を営む兄弟、役所の仕事仲間、夫婦、監督達自身、恋人たち、漁師の親子。彼らが過去を振り返りながら未来を目指して放つ言葉や表情のひとつひとつが、聞くことと語ることの間から生まれるとき、古来よりその土地の言葉が決して絶やす事の無かったもの、すなわち一番の被災者でもあった死者たちのこえへと接近することになる。『なみのこえ　新地町』『なみのこえ　気仙沼』の二編構成。大きな問題を抱えた場所の記録であると同時に、フィクションとドキュメンタリーの間を通り抜けて新しい記憶の創造へと向かった映画的探求の到達点。

■作品紹介

『うたうひと』は酒井耕・濱口竜介監督による『なみのおと』『なみのこえ』に続く東北三部作の第三部。二人は前二作における「百年」先への被災体験の伝承という課題に対して、東北地方伝承の民話語りから示唆を得る。栗原市の佐藤玲子、登米市の伊藤正子、利府市の佐々木健を語り手に、みやぎ民話の会の小野和子を聞き手に迎えて、伝承の民話語りが記録された。語り手と聞き手の間に生まれる民話独特の「語り／聞き」の場は、創造的なカメラワークによって記録されることで、スクリーンに再現される。背景となった人々の暮らしの話とともに語られることで、先祖たちの声がその場に甦る。映画と民話の枠を超えた、新たな伝承映画が誕生した。

■あらすじ

雪の降りしきるある日、宮城県栗駒山にある山荘で三人の語り手(伊藤正子、佐々木健、佐藤玲子)と民話研究者の小野和子による民話の語り聞かせが行われる。農家の手助けをした猿に嫁入りに行った娘が残酷な結末をもたらす物語や、ひょんな事から鼠の巣穴に入った事で富を持ち帰る話など、方言の抑揚豊かな各々の語り手が順に民話を披露する一方、積極的な聞き手としての姿勢を示す小野和子が民話への考察を行う。中盤から各話者の自宅で一対一の語り聞かせが始まり、彼らが民話の語り手となった所以や、幼い頃の情景などを織り交ぜながら、民話が語られ、人々にとってそれが如何に大切なものであったかが明らかになる。後半、季節の変わった栗駒荘で再び「みやぎ民話の会」による語り聞かせが行われ、民話が現在の人々に親しまれる様子が描かれる。民話の語られる背景への考察なども含め十数話を収録。

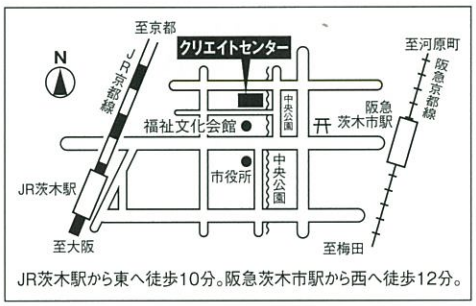
■上映スケジュール

第一部「なみのおと」(142分) Ⓛ51503
2017年2月9日[木]①10:30 ②14:00 ③19:00 (各回15分前開場)

第二部「なみのこえ」新地町編(103分) Ⓛ51507
2017年2月13日[月]①10:30 ②14:00 ③19:00 (各回15分前開場)

第二部「なみのこえ」気仙沼編(109分) Ⓛ51524
2017年2月20日[月]①10:30 ②14:00 ③19:00 (各回15分前開場)

第三部「うたうひと」(120分) Ⓛ51674
2017年3月1日[水](各回15分前開場)
①10:30(酒井耕監督アフタートーク)
②14:00(酒井耕監督アフタートーク)
③19:30(19:00〜酒井耕監督×砂連尾理プレ対談)



JR茨木駅から東へ徒歩10分。阪急茨木市駅から西へ徒歩12分。

■会場
茨木クリエイトセンター・センターホール 茨木市駅前四丁目6番16号 ☎072-624-1726

■チケット
各回500円(全席自由・日時指定) ＊就学前のお子様はご遠慮ください。

■予約開始日
12月9日[金]9:00 ＊財団の発売初日はインターネット・電話予約のみです。残席がある場合は翌日から窓口販売いたします。

■チケットのお申込み・お問合せ
茨木市文化振興財団・文化事業係 072-625-3055(9:00〜17:00)／**インターネットチケット www.ibabun.jp**
財団の発売初日はインターネット・電話予約のみです。チケットの引取り・窓口販売は発売翌日からです。上映当日のご精算もお受けします。
◎クリエイトセンター1階チケットカウンター(9:00〜17:00) ◎福祉文化会館3階チケットカウンター(9:00〜17:00)
＊インターネット予約については、コンビニ(セブンイレブン、サークルK、サンクス)でご精算・受取いただけます。(要手数料108円)
＊予約チケットの郵送をご希望の場合は、**〈チケット料金＋郵送手数料400円〉**を郵便局備え付けの「払込取扱票」でお支払いください。
手数料はご負担願います。払込確認後の発送となります。**〈払込口座〉00970-7-190576／加入者名:茨木市文化振興財団**

■その他プレイガイド(初日店頭販売あり 10:00〜)
Ⓛローソンチケット 0570-000-407(オペレーター対応)・Lコード予約 0570-084-005(Lコード:スケジュール欄に記載のとおり)
http://l-tike.com ＊ローソンチケットの取り扱いチケットは、ローソン、ミニストップ各店舗で直接購入できます。

酒井 耕／SAKAI Ko (写真左)
1979年長野県生まれ。東京農業大学在学中に自主制作映画を手掛け、卒業後社会人として働いたのち、2005年に東京藝術大学大学院映像研究科監督領域に入学。黒沢清、北野武らに師事。震災後、濱口竜介氏と共同で東北記録映画三部作『なみのおと』『なみのこえ』『うたうひと』を監督。現在は、仙台で民話の記録活動を続けるほか、地域の映像アーカイブ活動に関わっている。2015年に一般社団法人NOOK(のおく)を瀬尾夏美、小森はるか、長崎由幹、細谷修平らと立ち上げ、プランニング・レコーディング・プロダクトという3つの専門性を柱とし、それらの相互作用あるいは総体としての「ドキュメンテーション」を実践している。現在同法人理事を務める。

濱口竜介／HAMAGUCHI Ryusuke (写真右)
1978年神奈川県生まれ。東京大学文学部在学中は映画研究会に所属。卒業後、映画の助監督やテレビ番組のアシスタントディレクターを経て、2006年に東京芸術大学大学院映像研究科に入学。2008年、監督作品『PASSION』が東京芸術大学大学院映像研究科の第二期生修了制作展で上映されたほか、第9回東京フィルメックスのコンペティション部門に選出された。震災後、酒井耕と共同で東北記録映画三部作『なみのおと』『なみのこえ』『うたうひと』を監督。2012年、二部構成の大作『親密さ』を監督。2015年8月、『ハッピーアワー』が第68回ロカルノ国際映画祭で国際コンペ部門の最優秀女優賞を受賞(田中幸恵、菊池葉月、三原麻衣子、川村りら)。同作では2016年3月、芸術選奨新人賞を受賞した他、同5月には第25回日本映画批評家大賞選考委員特別賞を受賞するなど他多数受賞。

共催事業「猿とモルターレ」
(3月10〜11日／クリエイトセンター)
関連トーク

[プレ対談ゲスト]
砂連尾 理
JAREO Osamu
振付家・ダンサー
1991年、寺田みさことダンスユニットを結成。近年はソロ活動を中心に舞台作品のほか、障がいを持つ人や高齢者とのダンス制作やワークショップ、映画、オペラの振付など多方面に活動を展開している。東日本大震災における避難所生活者への取材を元にした舞台作品「猿とモルターレ」茨木公演では、酒井耕監督がアーカイブ・プロジェクトに参画している。著書に「老人ホームで生まれた〈とつとつダンス〉—ダンスのような、介護のような—」(晶文社)。立命館大学、神戸女学院大学、京都精華大学、天理医療大学非常勤講師。